

九州地方の考古学回顧(一)

賀川 光 夫

はじめに

「九州考古学回顧」という課題で戦後の九州考古学の歩みを振り返りたいと思ったのは太平洋戦争終結前後の一九四〇年頃から一九四五年前後に九州地方で活躍した戦前、戦中派の考古学者がつぎ次に他界されて、残されている人が少なくなり、その方々の学史的事蹟を残しておきたいと思うからである。また当時は今日に比較して記録保存のためのあらゆる事情が貧困であったから、遺跡、遺物の内容も明らかでなく、ことの真相を知ることが出来るような出版など望むべきもなかった。それらを網羅することは到底無理であるが、戦後間もなく、鏡山猛・森貞次郎先生のお供をして九州各地の調査に加えてもらったこと、恩師八幡一郎先生の導きで中央で企画された遺跡の調査に参加できたこと、日本考古学協会の発足で特定研究委員会が設置され多くの研究者と交流することができたこと、江坂輝弥・芹沢長介・鎌木義昌・乙益重隆・渡辺正氣・岡崎敬先生など多くの友人との親交から遺跡調査の体験ができ学恩を受けたことなどをもとに九州の考古学五〇年を回顧してみたいと思う。

一九四四年四月一日発行の『考古学雑誌』第三四巻四号の巻末に「総会についてのお断わり」と言う記事がある。これまで継続されていた考古学会の総会が戦局の都合で開けなくなったことにたいするお詫びの記事である。直後の八月五日には空襲の難を避けるために学童疎開が始り、敗戦が色濃く国民にのしかかろうとしていた。考古学雑誌はその後も引き続き発行され、一九四五年二月一日発行の三四巻九号まで編集を続けた。

考古学雑誌が復刊したのは一九四七年一月一日発行の第三四卷一〇号で巻頭に「本誌再刊の言葉」という短い文があるが、当時のことを考えると胸が詰まるような思いで復刊号を読んだ。

復刊一号となった第三四卷一〇号の巻頭論文は原田叔人先生の「正倉院御物と唐代貴族の用度」という論文で、宮廷遺物から日・中国文化の交流の問題を論述するもので、戦後の考古学にとって東アジアの視点をうかがわせるものであった。

九州に関するものとしては一九四八年四月二〇日発行の第三五卷一・二号合併号に鏡山猛、森貞次郎先生の「北九州考古学の現状」と題して戦中から戦後の活動が記されている。

さて、太平洋戦争の敗戦は、日本社会に大きな混乱をもたらしたが、自由に行動できる喜びを日本人だれもが強く感じとった。とくに歴史に対する発想が機敏に反応し、考古学、古代史学の分野が大きく転換していった。このような中で、日本古代の実相解明に考古学が果たす役割をはっきりと認識した考古学者の行動は登呂遺跡の発掘に結集された。弥生時代後期の集落と、水田跡が広々と露出された遺跡で調査の主役を演じた人々の中に八幡一郎先生の姿があった。九州からただ一人参加の鏡山猛先生の姿も見えた。登呂遺跡の発掘に惚れたのは当時考古学に情熱を持つ若い学徒であった。私は八幡先生の導きで遺跡の見学ができたが、数日の間調査隊の食糧調達の仕事を加勢させられただけで、登呂遺跡では直接発掘に参加できなかった。それでも八幡先生の話を聞くのが楽しかった。その頃八幡先生は弥生時代の水田と倉庫に関心があったようで、稲作の問題についての話には特に熱がはいった。

最近の考古学は登呂遺跡すら話題にならないくらい重要な遺跡が数多く発掘されている。バブルといわれた異常な経済活動が終息した今でも土地開発ブームにともなう緊急発掘が行われ、巨大遺跡の発掘に追われ、相次いで新発見が報道される。それらは、これまでになかった分析法で究明され驚くべき成果をあげている。しかしこの新発見と分析法は日本の新しい考古学の発展に寄与したかにみえるが、実は考古学自体の主体的実践行動として実を結ばないばかりか、



鏡山猛先生・筆者の発掘
佐伯市下城遺跡
1948年6月

日本の社会構造の変化に組み込まれた一つの産業考古学になろうとしている。このような考古学の変化の中で「考古学は何を考える学問」か、という認識にたつて過去の調査、発掘がどのように行われてきたか、戦後の九州について学史の頁を開いてみようと思う。

一 九州の風は東風

八幡一郎先生の講義を聞いて縄文文化の研究に情熱を燃やしていた私は、一九四三年学徒出陣で海軍に入隊し、航空部隊に所属した。四四年の前半は静岡県大井航空隊で飛行訓練が行われ、その偵察のための写真撮影や爆撃訓練の目標が静岡市登呂遺跡の上に建てられた工場であった。登呂遺跡は一九四三年三月に軍事工場建設によって発見された規模の大きな遺跡で戦時中最も注目された遺跡である。その遺跡の上に建っている工場が偵察の写真撮影や爆撃訓練の目標であったことは何かの因縁であろうか。

一九四五年太平洋戦争が終わると私は大分県佐伯市で戦後の第一年を迎えた。東北に近い北関東、栃木県に生まれ、東京で学んだ私は九州の冬はとても暖かく感じた。特に東九州は冬の光も明るく、時には郷里の五月を思わせる心地好い風も吹いた。そんな一九四五年九月敗戦により招集解除となった鏡山猛先生、疋田道文先生（佐伯市在住）と大分県佐伯市上堅田下城貝塚、下堅田村塩月長良貝塚の現地調査を行うことができたのは一九四七年一月であった。

一九四七年は日本の考古学研究の見直しが行われた年として注目された。七月から九月までの五十日余り静岡市登呂遺跡調査会による登呂遺

跡調査が行われ弥生時代の大型集落に関心がよせられた。この年から翌年にかけて九州では東京大学と早稲田大学の協同で、「古代日向の研究」(代表 駒井和愛・安藤更生)をテーマとした調査が行われた。この調査を指導された八幡一郎先生は一九四八年石川恒太郎先生とともに延岡市沖田貝塚の調査を行い、黒く磨かれた土器を手にして次のように言われた。「九州の縄文後期の土器と比較すると器形も製作技術も違う、また弥生初期の遠賀川式土器にも例をみないものだ、この土器の追及をしてみようか」といわれた。この宿題が後に縄文晩期磨研土器論の研究に役立つことになった。

鏡山猛先生は一九四五年九月敗戦で軍務を解かれたが、軍隊では憲兵分隊に勤務していたことが理由で教職を追放され、一九五一年一二月までフリーの考古学者として活躍していた。この時期に九州考古学会の基礎をつくり、九州文化総合研究所が九州大学の学外研究機関として設立され、現在の九州考古学会の基礎となった。

佐伯市下城貝塚の調査

佐伯市下城貝塚の調査・発掘は、一九四八年六月と十一月の二度にわたって行われた。遺跡の東側に堆積する貝塚から西側に広がる遺跡では、長方形の掘立式二棟の住居跡、その西側に竪穴住居跡がみつかった。竪穴の中央に平石と焼石が散乱し、フイゴの一部と鉄屑多数みつかった。この鍛冶遺跡と遺物は翌年の長貝塚からみつかった鉄鎌とともに弥生時代鉄生産に関して一つの問題を投げた。

下城貝塚では貝層下部に炭化した繊維が多数出土し、その下層の粘土質土壌表層上下にかなりの数の山形押形文がみつかった。炭化した繊維は、九州大学農学部盛永俊太郎先生の鑑定によりオオムギの茎との調査結果が鏡山先生のもとによせられた。オオムギの遺体は弥生時代の具体的作物の発見につながる資料であった。粘土質土壌を挟んで出土した押形文土器は、縄文早期土器の層位的発掘の最初の事例であった。

下城、長良貝塚の発掘は戦後初の組織的発掘であったが数多く問題とすべき事例があらわれた。これらの中で注目されるのは、遠賀川系統（板付B式）の鉢形土器の口縁部近くに粘土の帯を巻き付けて刻み目をいれた新例の土器が主体的に出土したことである。これを刻目凸帯文とよび形式名を下城式土器とよぶことにした。以後考古学会では「下城式土器」の名でよばれ、東九州弥生中期の土器形式となった。

下城貝塚・長良貝塚の発掘から三点の問題点を上げることができる。

一、下城貝塚から炭化したオオムギの繊維（穂・茎）が大量にみつかったこと、同じ文化層とおもわれる長良貝塚から鉄製の鎌がみつかったことがその一である。すでに下城貝塚に隣接して弥生中期の土器をとまなう製鉄跡（鍛冶）がみつかったことと併せて、弥生中期に一部では石庖丁にかわって鉄鎌による収穫が行われていたことを知る資料として注目された。

さてオオムギの炭化した繊維は九州大学農学部盛永俊太郎先生の鑑定によるもので、当時の九州では出土例はない。当時ムギについては、寺司見国先生により鹿児島県大口盆地の一部（採集場所不明）から採集した弥生式土器にオオムギと思われる圧痕が印されていたとの教授があった。また中山平二郎先生は福岡県飯塚市立岩遺跡付近から出土した弥生式土器にオオムギと判別される土器圧痕がみつかったとの教授をえた。

ムギの種子の発見は当時弥生時代に例がなく、東京都板橋区志村前野谷遺跡から焼失したムギの種子らしいものが土師式土器を含む泥炭層から出土していることが報告されているに過ぎなかった。

弥生時代の農業については、福岡県筑紫郡那賀村大字竹下、八女郡長峯村岩崎遺跡（「土器の有無未詳なる石器時代遺蹟」『考古学雑誌』第一〇巻九一―一〇九一）などからコメの炭化遺物が発見されていることで稲作による農耕が行われたと考えた時代であった。（一九五四年、文化財保護委員会の福岡県糸島郡糸島町支登支石墓の調査の際、中山平二郎先生より長峯村岩崎遺跡出土のコメを資料として寄贈され、炭化コメの実態に初めて触れることができた）



第1図 大分県下発見下城式土器関係資料 (1/6大)

- 1-6 佐伯市下城遺跡；7-20 佐伯市長良貝塚；21-24 大分郡由布院町並柳字山田
 25 東国東郡国東町吉木たばた；26-28 国東町田深；29 国東町安国寺字前田
 『白汚遺跡』(佐伯市教育委員会・1958年)より転写(小田富士雄作図)

二、製鉄跡（鍛冶）の発掘は下城遺跡調査の成果のうちで価値あるものであった。製鉄跡は東西五メートル、幅三メートル五十センチの長方形竪穴で発見された。この竪穴の中央よりやや西側によって長さ四十センチ、幅三十五センチ、厚さ十五センチの焼けた平石がみつかりその周囲から鉄滓四〇、製品の残片一六点とともにフイゴ片二点などがみつかり、焼土、炭などの検出から製鉄跡と判断することにした。この竪穴から出土した土器の特徴（福岡県城ノ越遺跡出土土器）から弥生中期初頭の製鉄跡と考えることができた。

製鉄跡は一九四二年石川恒太郎先生の「上代の製銅遺跡に就いて」の論文に対して四三年には西尾圭太郎先生の「石川恒太郎氏の上代の製銅遺跡に就いて」の論文が『考古学雑誌』第三三巻から三四巻に掲載され、以後両氏による論争が展開された。その後間もない一九四八年の製鉄遺跡の発見であったから注目された。戦後『考古学雑誌』が復刊されたのは一九四七年の第三四巻第一〇号で、つづいて四八年の第三五巻一、二号合併号、三号に後藤守一先生の「日本上代に於ける銅鉄文化の接触（上・下）」という論文が掲載された。このようななかでの製鉄跡の発見は学会の注目の的になった。

三、下城貝塚をはじめとして長良貝塚出土の土器の主要な形式は、刷毛仕上げの鉢形土器口縁部に刻目凸帯文を施し、底部平底土器である。この土器が弥生式土器として考古学の目に止まった最初のことであったため、この刻目凸帯文土器に「下城式土器」という名をつけて弥生中期の一つの標式土器として学史に残すことになった。この下城式土器の研究編年は一九五八年佐伯市白瀉遺跡の発掘で大量の土器を発掘し、層位の検討、形式論から小田富士雄先生が詳細に分類整理している。（賀川光夫・小田富士雄『白瀉遺跡』佐伯市教育委員会・一九五九）

下城式土器の分布範囲は、大分県南部地区を中心として広く東九州に及ぶ範囲にまとまりをみせ、弥生中期を主体にして一部は後期に及んでいる。この刻目凸帯文の土器形式についての出現と消失については幾つかの議論があるが未だ納得する見解はない。いずれにしても東九州の弥生文化論にとって解決されなければならない問題である。

下城・長良貝塚の発掘は弥生文化に大きな問題を投げ、幾つかの検討すべき材料を提起した。戦後九州地区で行われた早い頃の学術調査であったこともあり、調査には東京大学駒井和愛、八幡一郎（後に東京教育大学教授）、文部省技官齋藤忠、有光教一（後の京都大学教授）など当時の代表的諸先生が立ち合われた。このようにして九州戦後の考古学研究は一九四七年東九州から吹き始めた。

安國寺弥生式集落遺跡の調査

私は佐伯市に在住して初めての冬をむかえた一九四五冬の暖かい風を今もはっきりと覚えている。佐伯市で行われた下城貝塚の発掘に啓発された大分県東国東郡国東町桜八幡宮司河野清美先生（大分県史蹟名勝天然記念物調査委員）によって安國寺弥生式遺跡が注目を浴びることになった。一九四九年二月と一月の二度にわたって試掘が行われた安國寺遺跡は国東町で別府湾に注ぐ田深川の流域、泥炭層の中に埋没した遺跡であった。泥炭と化した遺跡は数多くの植物遺体や未知の木器を保存し、しかも弥生終末から古墳時代初期までの有望な土器を出土する遺跡であった。この遺跡調査を契機として、福岡市経済界が資金を調達してつくられたのが九州大学学外研究所、「九州文化総合研究所」である。この研究所は九州の重要遺跡の調査と研究に資金を援助する機関で、後の太宰府遺跡総合調査、唐津市柏田遺跡などはこの研究所が資金を援助した。

九州文化総合研究所は理事会を以て議事を行行し、安國寺遺跡の調査資金の調達支出を行ったが、安國寺遺跡の調査には九州大学の日野開三郎先生（東洋史）が理事として調査中遺跡に滞在されることになった。調査期間は一九五〇年から五二年までの間五次にわたる調査で、地元の安國寺に合宿して行われた。

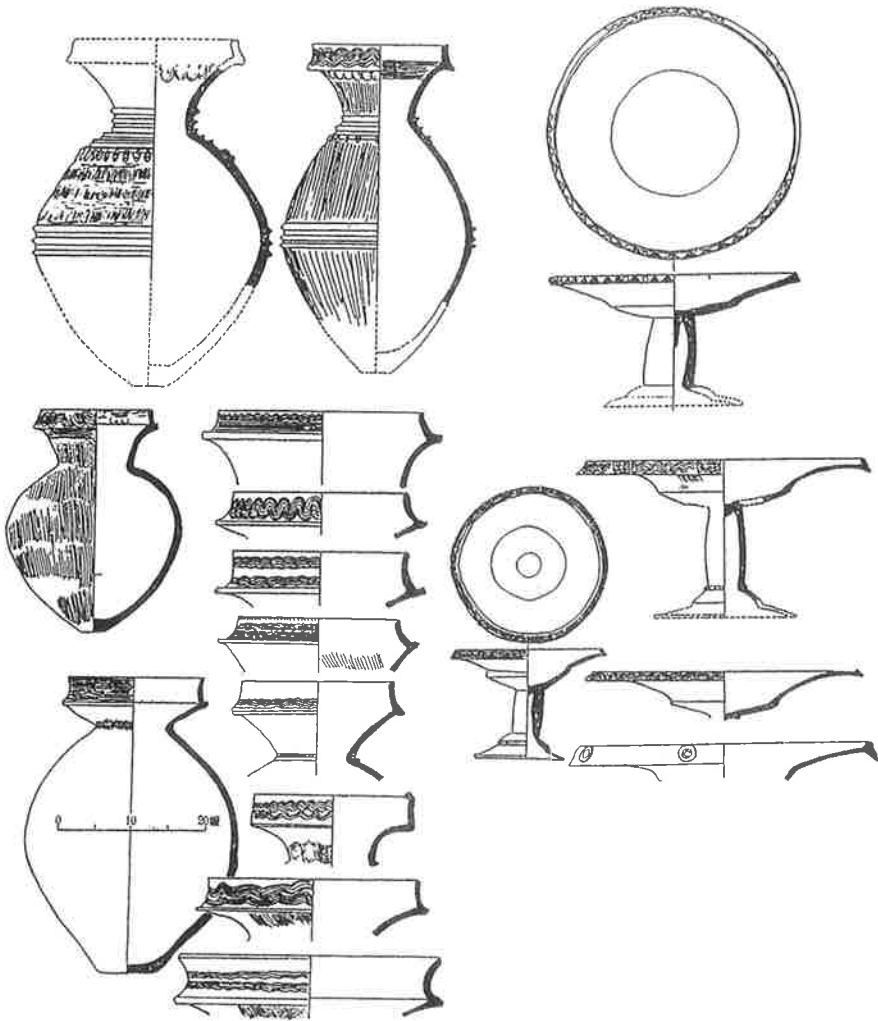
遺跡は田深川流域低地の幅六〇〇メートル内外の比較的狭い平地にある。現在は水田地帯であるが、洪水氾濫がたびたびあって堤防工事がしばしばおこなわれてきた。この低地に遺跡（住居跡をふくむ低湿地遺跡）が存在していた。低

地は沖積層と見なされる堆積物からなり、新旧二地層群がみとめられた。新規沖積層は耕作土の下部に分布し、三〇センチ―二メートルと一様ではない。青色粘土から、暗褐色有機質粘土などの泥炭層からなり、この有機質土層に遺物が堆積されている。下部の古期沖積層は新規沖積層の低位の礫層で、田深川右岸の露出場所では約二メートルを計ることができた。礫は古い安山岩と新鮮な角閃石安山岩からなる。安国寺遺跡の地形、地質について調査された松本達郎先生（九州大学教授）は調査結果を次のように述べている「古期沖積層が示すように、火山地形と激しい浸触運搬作業をともなう急流又は洪水性堆積物である礫層の上に停水性にちかい状態で泥炭化した堆積層が形成され、そこに弥生時代の植物化石と遺物を堆積させている」。

泥炭層から見つかった植物遺体の状況を調査された細川隆英先生（九州大学教授）は弥生時代後期の安国寺遺跡周辺の植生について「モモ、オニグルミ、アカマツ、クス、エゴノキ、アラガシなどの遺体の発見からみて、常緑広葉樹林を主体とする樹木に覆われ、水辺にエゴノキが白い花を咲かせて茂り、ムラには多くのクスの大木がていとして聳えていた。」とのべている。

さて安国寺遺跡は弥生時代終末の土器から土師式土器を出し、弥生時代から古墳時代の過度的状態をしめす豊富な資料を提供してくれた。住居跡は三方を田深川に注ぐ水路の一部に人工を加え、U字形の濠状水路に囲まれた舌状地帯に集中していた。住居は堀立式の建物と推定され、その柱穴が濠縁から西側に広がり、三百一穴がみつかった。柱穴は中央の幅五メートルにわたる空地の周辺に密集し、東側縁端部に埋甕（カメ棺）四基が出土した。その小型単甕の埋葬から見て小児埋葬が集落の中で行われていたことになる。

柱穴には柱根のあるものが数多く見られ、建物に使用されたと思われる建築材がU字形の水路（泥炭層）から見つかった。（一九八五年―一八八年の第二次調査でU字形水路から一棟分の建築材が発見され、高床の建造物であることが明らかとなった）。



第2図 大分県国東町安国寺式土器（複合口縁・櫛目文）
『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査』（1957年）より抜粋（賀川光夫作図）

鏡山猛先生はこの密集した集落の三方を泥濘で囲むことについて「濘の一部を水田に利用し、その管理が便利あること、水を含んだ柔軟な泥土は外敵や、動物の侵入を防ぐ障害物の役割をなしていたことなどで、環濘集落と同じ効果がある」と述べている。ここで鏡山先生は環濘集落と共に弥生時代の囲柳集落について、一九三八年発掘の福岡市比恵遺跡調査（比恵遺跡は福岡市JR博多駅の南にあり鏡山猛・森貞次郎両先生によって環濘集落が発掘され、その後一九五二年から八四年の第八次まで調査が行われた。環濘集落の学史的遺跡）以来のまとめとして「濘は防塞的な面と住居外劃の隔離線としての精神的な効果を重視していた」と結んでいる。

泥濘的水路から夥しい植物遺体が出土している。これらは細川隆英先生によって調査されて弥生時代の植生が報告された（植生については一九八五年からの第二次調査で笠原安夫、安田喜憲、佐々木章先生など多くの学者によって分析されている）。また木器や建築材も数多く出土し、研究材料として注目された。このうち木器については乙益重隆先生が民俗学的知識をもとに数々の断片資料を処理し、立派な報告文を書かれた。（建築材については一九八五年度以来の第二次調査で出土したほぼ一棟分の資料を沢村仁、山本照雄両先生によって分析されている）。

木器や建築材の中には、鋭利な刃物で加工したあとが明らかで、鉄の利器で製作し、使用したものとみられる。また鍛冶が行われたことは鉄滓が出土したことで理解できる。石器は出土が少なく僅かに凹石が多いものの石斧や石鏃は数点の出土に止どまった。その中で砥石が目立つのは金属器の利用が石器を凌ぐことによるものであろうか。

出土遺物の庄巻は櫛目式土器の大量出土であった。主体は白味をおびた色に焼成された壺形土器が大勢をしめる。器形は単純で砲弾形、外反する口縁部を特徴とし、丸底で器壁に刷毛状工具で荒い刷毛目（櫛目）仕上げの痕跡が見られる。この壺形土器の口縁部に粘土の「タガ」を内反させ、重ね合わせて複合口縁とし、そこに櫛歯文（波状文が主体）を施す。高杯の口縁部にも同じく複合口縁が見られ、波状文を主体とする櫛目文を施している。当時の九州では稀有な複合口縁の土器で、これを「安国寺式土器」と呼ぶことになり、以後東九州の弥生式後期土器の標識となった。

「櫛目式土器」については一九四四年の『考古学雑誌』第三四卷第八号に樋渡正男、瀬之口傳九郎先生によって「日向川南村に於ける弥生式土器」という論文に掲載されている。それによると複合口縁の壺形について、「櫛目文壺形土器」の名称で触れられていた。この土器形式が筆者の注意事項であったが、大野川の下流戸次町の河岸段丘の縁端部に広がる般若寺遺跡から大量の弥生式土器が台風で流失していたことよって一九四八年一〇月遺跡を調査することができた。

戸次般若寺遺跡から出土の櫛目文を施す土器はかなりの数に及び分類の好資料であった。これについて謄写印刷で「豊後国戸次般若寺遺跡の研究」（一九四九年）の報告がある。この調査を基礎資料として、「安国寺式土器」形式分類が可能になった。

当時の櫛目文を施す土器についての論文として小林行雄先生（元京都大学教授）の「弥生式土器に於ける櫛目式模様の研究」一・二・完『考古学』一卷第五・六号、二巻第五・六号、三巻第一号（一九三〇—三二年）、『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告第一六冊（一九四三年）などのほかわずかな参考資料しかない時代であった。『大和唐古弥生式遺跡の研究』は一九四三年二月福岡に出張のさい鏡山猛先生から寄贈され安国寺遺跡の報告書作成に参考になった。そして筆者が愛読した研究書の一つで、今日までにボロボロになり、いまに読み続けている。そしてこの報告書が鏡山猛先生と安国寺遺跡の思い出となった。『唐古弥生遺跡の研究』は一九四三年三月、京都市桑名文星堂から六〇〇部が出版され値段が三〇円であった。当時大学出の初任給の平均が三〇円ぐらいの時代であるから、現在の値段で二〇万円位と考えればよい。当時としては目の飛び出るほどの高い本であった。戦時中でもあり、考古学専攻の学者、学生の少ない時代であったから思い切った出版事業であったが、今から考えると先のみる目が高いというほかはない。なぜなら弥生時代の研究でこれほど参考になる報告書はまづないと思うからである。

安国寺遺跡は一九四九年の二度の試掘にはじまり一九五〇から五二年までの間、五次の発掘調査が行われた。遺跡の

調査に参加した人たちは鏡山猛、森貞次郎、乙益重隆、渡辺正氣、岡崎敬、松尾禎作、坂本経莖、曾野寿彦、入江英親、田辺哲夫、筆者(考古学)を加え、当時の九州考古学の総勢であった(現在の考古学者総数から見ると隔世の感がある)このほか楢垣元吉(日本史)、日野開三郎、船木数馬(東洋史)、米倉二郎(地理)、木下穠城、松本達朗(地質)細川隆英(植物)などの諸先生などが集まり学際的メンバーで調査がすすめられた。そして地元大分県から半田康夫、安河内博(日本史)先生の参加があり、特に国東の河野清美先生がお元気で調査現場に姿を見せられたことが強く印象に残る。それぞれの先生との思い出は尽きぬものがあるがそれはいずれ稿を改めることにする。

さてこれら諸先生の大部分の方は既に他界され、考古学専攻で現存するのは森貞次郎、渡辺正氣、田辺哲夫先生、筆者の四人になった。まさに世代が変わったのである。

ここで当時小倉中学の生徒であった小田富士雄先生(現福岡大学教授)は安国寺遺跡の発掘に教師田頭喬先生の引率のもとで見学された。小田先生はこれを契機に九州大学に進学し、一九五二年から行われた太宰府都制度の研究の現場で一緒に発掘をおこなうことができた。

一九五一年夏、九州大学資料館で乙益重隆、渡辺正氣、小田富士雄先生とともに安国寺遺跡出土遺物の整理に汗を流した。二ヶ月の集中的作業で小田先生は土器接合に精を出し、おかげで実測が迅速に進んだ。小田先生はその後考古学者として大分県の数多くの調査を指導し、学者として大成された。

安国寺遺跡の報告書は文部省研究成果刊行助成金をえて一九五七年、『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査』として刊行された。この報告書は鏡山猛(遺跡)、乙益重隆(木器)、渡辺正氣(石器)、賀川光夫(土器)松本達朗(地質)、細川隆英(植物)、永松土呂(粉粒)の執筆で刊行された。刊行された報告書は本文二八四ページ、図版八四ページ、英文レジュメ一三ページで当時としては豪華な報告書となった。報告書が刊行されると小林行雄先生の書評が毎日新聞に掲載され弥生時代の研究に貢献した学術研究書として評価され、毎日新聞出版文化賞を受賞することになった。

戦後九州の弥生式文化研究の風はこうして東から吹いた。佐伯市下城遺跡、国東町安国寺遺跡の研究は以後の弥生時代農耕の課題を土壌に学史として注目された。

安国寺遺跡の発掘が開始された一九五〇年前後から九州各地で研究課題を掲げた調査が行われるようになった。特に戦前から中山平二郎先生によって開かれた近代考古学の研究は鏡山猛、森貞次郎、渡辺正氣、岡崎敬先生などに引き継がれ、研究が蓄積されていた福岡県では各所で調査が再開されることになった。さらに一九四八年日本考古学協会が発足されると、重要遺跡の学術調査が特定研究として採択され森貞次郎、杉原莊介、岡崎敬先生などを中心として板付遺跡の調査が開始されることになった。これを機に九州各地で考古学を展望することができ重要な発掘があいつぐことになる。

戦後の九州各地の調査

一九四五年の敗戦後一九五〇年まで、九州各地では発掘がおこなわれたが、そのなかで注目されるものをあげると次のようなものがある。

日本考古学協会の発足は一九四八年で、全国的協同研究を行う機関として専門の考古学者をもって考古学研究を行うことになった。

一九四八年一月二日、四月二四日、五月一四日のおのうの一日、鹿児島県伊佐郡羽目村焼山古墳の発掘が寺師見国、樋口隆康先生によっておこなわれ、地下に設けられた特徴から「地下式板石積石室」（樋口隆康先生の提唱による）とよび南九州に分布する地下式古墳の名称として位置づけを行った。

同年一月二〇日、坂本経堯先生は熊本県玉名郡睦合村犬塚古墳の発掘を行い、前方後円墳の後円部に舟形石棺を確認した。更に坂本先生は五月一日から三日まで熊本県八代郡龍峯村の巨石墳の調査、続いて六月一八日と八月十日の両日

玉名郡高道村、弁財天古墳などの基礎調査を行っている。同年一〇月には玉名郡伊倉町城ヶ崎貝塚、同町五社貝塚の発掘を行い共に弥生式土器のほか縄文後期土器の出土を確認している。

同年六月二十五日から七月三日まで坂本経堯先生によって行われた玉名郡高道村古閑原遺跡の調査は注目すべきものであった。上層は弥生時代の泥炭層で下層は阿高式土器を包含する縄文中期の貝塚であった。この貝塚からおびただしい植物、動物遺体が発見され、その中にモミ（稲）八粒が発見されている。この炭化したモミについては後に異論があつて縄文中期のモミという決定はいまにない。しかし縄文中期の稲作については再吟味の必要はある。

同年四月一日より二〇日まで「日向考古学調査団」（团长駒井和愛先生〈東京大学〉、安藤更生先生〈早稲田大学〉など）による日向国分寺跡の実測及び住居跡の発掘が行われ、寺域についての確認が行われた。この調査の一部として延岡市沖田貝塚の発掘が八幡一郎（東京大学）によって行われた。

一九四九年一月四日より六日まで小林行雄、坪井清足先生などは鹿児島県西桜島村武字榎川、桜島武貝塚の発掘が行われた。この貝塚は、一九四四年一月に発掘した地点の西側で、層位によって上層に縄文後期市来式、下層に指宿式土器を確認し、市来式には西平式、鐘ヶ崎を、指宿式には出水式土器が共伴したことが確認された。このことによって九州西部と南部との縄文後期土器の関係が明らかにされた。

同月二六日早朝、奈良県斑鳩町法隆寺金堂の壁画模写作業の間、金堂が焼失した。とくに壁画は見るも無残な状態と化した。この災害は世界的に報道され、戦争で破壊を免れた文化遺産が平和になった後の人災によるものであるだけに文化遺産保護に対する意識の高まりをみせた。

一九四九年の調査で注目されるのは二月一八日より四月一八日までの長期にわたり調査された福岡県糸島郡怡土村曾根石ヶ崎遺跡の発掘であった。調査は森貞次郎、有光教一、原田大六先生などによって行われ、弥生中期の支石墓を含む弥生中期のカメ棺の調査で、以後の弥生中期のカメ棺の研究に重要な示唆を与えた（原田大六「福岡県石ヶ崎の支石

墓を含む原始墓地」『考古学雑誌』第三八巻四号 一九五二。

鹿児島県では七月から八月にかけての長期にわたって川口貞徳先生による鹿児島市一ノ宮遺跡が発掘された。弥生時代の集落遺跡で、寺師見国先生の提唱する大隅式、薩摩式土器の分類に従い弥生中期時の研究に貢献した。

戦前明石市八木の海岸の洪績層から原人遺体の発掘に成功した直良信夫先生は、福岡県門司市（北九州市門司区）松ヶ枝恒見の洞窟の発掘を一九四九年一月四日より三日まで行った。この発掘で目標の洪績世人骨及び他の生物遺体は見つからなかったが、日本における旧石器研究にかける直良信夫先生の意欲ある調査であった。

一九五〇年代に入ると、ようやく戦後の落ち着きもみせてきたが、六月二六日、北朝鮮軍が韓国に進入して朝鮮戦争が起こり日本にも緊張が伝わってきた。しかし朝鮮戦争は一部で経済特需を生み、日本の戦後復興がゆるかに進んだ。このような背景から考古学研究も各地で行われるようになり、九州での発掘調査も進展していった。

まず三月一四日から二六日にかけて「日本考古学協会古墳文化特別委員会」（代表・小林行雄先生）が福岡県糸島郡一貴山村銚子塚の発掘を行った。洪績大地に築かれた前長一〇メートルの前方後円墳の墳頂部の石棺内部から方格規矩四神鏡、長宜子孫内行花文鏡の舶載鏡のほか八面の仿製鏡八面の鏡が出土した。この仿製鏡のうち六面は二面ずつ二種類の三角縁神獸鏡の同范鏡であった。その他多数の遺物が出土して注目された。

四月二五日から五月五日にかけて、桑山龍進先生は長崎県五島列島の遺跡の調査を行い、この基礎調査で五島列島の遺跡分布の基礎ができた。

七月一四日から二一日まで三木文雄先生（東京国立博物館）による長崎県対馬仁田村デিশョウゴウ古墳の発掘が行われ、箱式石棺内部から舶載鏡ほか陶質土器、土師器など多数がみつかった。また同じ七月一八日から二一日、杉原莊介先生は船越村賀谷洞窟の調査を行った。この二遺跡の調査は日本考古学協会「九学会対島総合調査」による。

九月五日松尾禎作先生は佐賀県杵島郡朝日村牛の谷経塚の発掘によって経筒と貿易陶磁が報告された。当時としては

貴重な発掘資料で議論があった。

一二月五日から九日の五日間、川口貞徳先生は鹿兒島県肝属郡田代村岩崎遺跡の発掘を行った。発掘された縄文土器は、凹線文または指宿式土器に類似する沈線文を施し、特有の土器形式で「岩崎式」の形式が与えられた。

一二月五日より一五日まで駒井和愛先生は（日向考古学調査団）宮崎県延岡市稲葉崎古墳の調査を行い、短甲をはじめ内行花文鏡など数多くの出土品があった。駒井先生は調査後大隅半島各地の「地下式墳墓」（地下式土壙）の調査を実施した。